

てら まえ い せき
寺 前 遺 跡

中部横断自動車道南部インター建設事業に伴う発掘調査報告



2009. 12

山梨県教育委員会
国土交通省関東地方整備局

寺 前 遺 跡

中部横断自動車道南部インター建設に伴う発掘調査報告

2009. 12月

山梨県教育委員会
国土交通省関東地方整備局



寺前遺跡とその周辺 1（南から富士川を望む）



寺前遺跡とその周辺 2（東から調査区を望む）



寺前遺跡とその周辺 3（西から富士川を望む）



寺前遺跡の土層（TP 1）



寺前遺跡の土層 (TP 2)



寺前遺跡の土層 (TP 3)

あらまし

南部町は、平成15年3月1日に富沢町と南部町が合併して誕生した町で、山梨県の最南端に位置しています。県庁所在地の甲府からは南へ約60kmの所にあり、標高は157m前後で平均気温は15度と高く、温暖でとても過ごしやすい町です。

この町には、県内の旧石器時代を代表する万沢地内の天神堂（てんじんどう）遺跡を初めとして、本郷地区には、お茶畑の広がる地区に原間（はらま）遺跡があります。中世では旧富沢町の福士にある真籠城（まじのじょう）跡があります。

天神堂遺跡から出土した旧石器時代の遺物は、県の考古資料として平成16年5月6日、1034点が指定を受け、真籠城跡は戦国時代の城郭として県の史跡に指定されています。原間遺跡は、本郷地区ではもちろんのこと町内でも有名な周知された縄文時代の遺跡です。

旧南部町では、51カ所の遺跡が周知されており、旧富沢町では、山梨県の遺跡台帳によると51カ所が存在しています。ですから、南部町全体では、102カ所の遺跡があります。今回、発掘調査された寺前遺跡を含めると103カ所の遺跡となりました。

さて、本書の寺前遺跡ですが、南部町から市川三郷町までの約28kmが国土交通省と山梨県による「新直轄方式区間」で、中部横断自動車道南部インター建設に先立ち平成20年6月に試掘調査が行われました。

その結果、掘り窪めた穴（土坑）や土器（遺物）などが発見されたことにより、発掘調査を実施することとなりました。発掘調査は、同年10月14日から開始され12月9日まで行われ、試掘確認調査も実施されました。

左下の写真は、土坑の中の土を掘っているところです。小さい穴の中に入ってるの作業ですから、動きづらくてちょっと大変です。右下の写真は、土坑を掘りあげた状況です。



小石がたくさん写っていますが、もともと土の中に入っている石です。左の写真を見ると、地面の上には小石がありませんが、ちょっと掘り下げるときれいな小石がごろごろ出てくるのがよくわかります。

狭い穴の中に入ってるの作業ですから、前に進めず、後ろにも行けず、振り向くことも困難な状況です。



下の写真は、発掘調査作業の全体写真ですが、一つ一つの遺構（土坑や溝など）を掘削したり、遺構の図面作成を行ったりしているところです。地元の皆さんとの協力を得て、作業を進めることができました。

発掘作業が初めての皆さんでしたが、測量器を使って目盛りを読んで頂いたり、図面作成のお手伝いをして頂いたりしてとても助かりました。

ありがとうございました。



今回の発掘調査成果ですが、縄文時代と中世と思われる地面を掘り窓めた穴（土坑）が12基と溝が2条、地面が焼かれた跡（焼土遺構）1基などが発見されました。また、遺物は小破片の土器と石器数点と極めて少ない出土でしたが、発見された遺構などから考えてみると、住居跡の存在がないこと、狩猟の場所ではないことなどから、本遺跡の周辺には小さいながらも縄文時代の集落を想定することのできる遺跡でした。

発掘調査も終了し、年も明けた3月17日に寺前遺跡へ行ってみました。左下の写真が調査中の状況です。遺跡を西から東の富士川方向に撮影した写真です。右下の写真が工事中の状況で、国道52号線から直接入ることができますように広くつくられています。最終的には、南部インターチェンジへ通ずる道となります。本文中の第2図の工事画面で、左が西側、右が東側になっています。

3月21日には、南部町中野の南部インターチェンジ（仮称）建設予定地内で起工式が行われ、日本海と太平洋をつなぐ重要な道路基盤となります。



序

本書は、国土交通省と山梨県による「新直轄方式区間」約28km（南部町から市川三郷町まで）の中部横断自動車道建設事業の内、南部インター建設に伴う寺前遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

平成19年2月に計画路線内の現地踏査を行い、中野地区周辺では発掘調査が行われておらず、「地形などを考えた上で試掘を実施する必要性がある」と国土交通省と学術文化財課へ報告したところです。

そして用地の取得後に、建設予定地内の試掘調査を平成20年6月から開始し、南部インター建設部分において新たに遺跡の発見があり、遺跡名を「寺前遺跡」と付しました。

発掘調査当初は、慈眼寺の東側正面ということもあって、寺院関連の遺構が見つかることではないかと想像されましたが、実際に調査を実施してみると、打製石斧や縄文土器片、中世の陶器片などが見つかりました。また、遺構につきましては、縄文時代の土坑や中世と思われる土坑、溝2条、地面が焼かれた焼土遺構などが調査されました。

このような遺物から考えて、発見された遺構は縄文時代を中心としたものと想像されます。しかし、住居跡などが見つかっていないことから、おそらくこの周辺に縄文時代の小規模ではありますが、集落の存在が想定されるところです。

南部町には周知の遺跡が多くあり、今後も予定路線地では遺跡の有無を確認するための試掘調査等が実施されます。そのため、今後新たに発見される遺跡も増加することと思います。

こうした発掘調査の成果が、南部町の歴史を解き明かすことに貢献できれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書作成にあたり、さまざまご協力をいただいた関係者や関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成21年5月30日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 小野正文

例　言

1. 本書は、山梨県南巨摩郡南部町中野字寺前地内に所在する寺前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 書籍名は「寺前遺跡」であり、副題は「中部横断自動車道南部インター建設に伴う発掘調査報告書」である。
3. 「寺前遺跡」は、平成20年6月に山梨県埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」という）が実施した試掘調査によってみつかり、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地として登録された名称である。
4. 本書掲載内容は、寺前遺跡発見までの経緯と中部横断自動車道南部インター建設に伴い埋文センターが平成20年度に実施した発掘調査成果をまとめたものである。
5. 調査及び報告書刊行までの作業は、国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所からの委託を山梨県教育委員会が受け、埋文センターが担当した。
6. 寺前遺跡に関わる発掘調査は、平成20年2月18日～20日・3月7日、6月16日～20日の期間に試掘調査を実施し、本調査を平成20年10月14日～12月9日の期間でおこなった。
7. 本書刊行までの作業は、平成20年12月10日～平成21年5月30までの期間に埋文センター内にて実施した。
8. 本書に掲載した遺構・遺物・作業状況写真は、山本茂樹・上原健弥が撮影した。
9. 本書に掲載した遺跡空中写真・図化作業は株式会社シン技術コンサルに委託した。
10. 発掘調査に関わる世界測地系座標・グリッドポイント設定・基準標高測量は、株式会社一漸調査設計に委託した。
11. 調査に関わる写真・記録類は埋文センター、遺物は山梨県立考古博物館で保管・活用している。
12. 本書の編集は、埋文センター副主幹文化財主事山本茂樹・非常勤嘱託上原健弥がおこなった。
13. また、執筆の分担は次のとおりである。
山本茂樹：あらまし、第1章、第2章、第4章の遺構について
上原健弥：第3章、第4章の遺物について、第5章・写真図版
14. 本書刊行に関わる整理作業（実測・図化・編集・校正等）の主な分担は以下のとおりである。
遺物洗浄・注記・・・・・・山本茂樹
遺物写真・・・・・・・・上原健弥
遺物実測・拓本・トレース・・・上原健弥
遺構図トレース・・・・・・山本茂樹・上原健弥
図版作成・・・・・・・・・・山本茂樹・上原健弥
写真図版作成・・・・・・・・上原健弥
表作成・・・・・・・・・・上原健弥
15. 本書刊行にあたり、次の組織や方々から指導・助言および協力を戴いた。記して謝意を表する。
南部町教育委員会・新津健・保坂和博・石神孝子・網倉邦生（順不同・敬称略）

凡　例

- 本文中に頻繁に使われる組織名やその他の用語については重複をさけるため各用語の最初の部分で（以下、省略名）と断り省略している。
- 本書中には、発掘調査に関わる用語の記載が複数あるが、その使い分けは以下の通りである。
試掘調査：遺跡の有無を確認することを第一の目的とした発掘調査
試掘確認調査：周知の埋蔵文化財包蔵地内において、発掘調査の必要性や調査に必要となる期間や経費等の積算基準となるデータを収集することを主眼とした発掘調査
本調査：調査対象地内の全面を掘削し、埋蔵文化財を記録保存するためにおこなう発掘調査
- 本書中に記載されている遺構名は、本調査時の名称を用いている。なお、試掘調査時の呼称との対応関係については第2表の下方に記載した。
- 掲載されている図版のスケール、方位、スクリーントーンの用例は必要に応じて図中に示した。
- 掲載した図面の縮尺は、原則として以下の通りである。
遺跡関連：中部横断自動車道路線図など 1/50,000 遺跡位置図 1/25,000 工事図面 1/1,000
グリッド設定図 1/200 基本土層図 1/20
遺構図：平面図 1/40 断面図 1/40
遺物関連：土器類 1/2 石器・剥片類 1/3
- 遺構図に示した方位（N）は磁北で、全体図に示した方位（N）は、国土座標による真北である。
- 遺構図版中のスクリーントーンは、焼土検出範囲を示す。
- 石器実測図は3面展開を基本とし、必要に応じて刃部などの面の展開図を作成した。
- 調査区図（第10図）に示した等高線の間隔は、10cmである。
- 第4表及び第5表中に記載した色調は、「農林水産省農林水産技術会議事務局監修 2001.1『新版 標準土色帖』」を参考にした。
- 第5表の重さはグラム（g）で、小数点第2位以下を四捨五入した。
- 各章の参考文献は、それぞれの章末に記した。

目 次

口絵
あらまし
序
例言
凡例
目次

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査までの協議と調査経過	1
第3節 調査組織	2

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の方法と基本層位

第1節 調査の方法	8
第2節 基本層位	8

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 土坑について	11
第2節 焼土遺構について	12
第3節 溝について	13
第4節 遺構外出土遺物について	13

第5章 まとめ

第1節 調査成果について	19
第2節 データ一覧（遺構・遺物）	20

写真図版 25

抄録

挿図目次

第1図	中部横断自動車道路線図（平成18年4月）及び南部町内の遺跡分布図	5 - 6
第2図	寺前遺跡位置図	7
第3図	グリッド設定図	9
第4図	基本土層図と土層注記	10
第5図	検出遺構（1～4号土坑）	14
第6図	検出遺構（5～8号土坑）	15
第7図	検出遺構（9・10・12号土坑）	16
第8図	検出遺構（焼土遺構・1～2号溝）	17
第9図	出土遺物	18
第10図	調査区の地形と遺構・遺物の位置	23-24

表目次

第1表	遺跡地名一覧	4
第2表	土坑と焼土遺構の一覧	20
第3表	溝状遺構の一覧	20
第4表	土器・陶磁器の一覧	21
第5表	石器の一覧	22

写真目次

図版1	調査区全景	26
図版2	調査区内の状況1	27
図版3	調査区内の状況2	28
図版4	遺構1（1～3号土坑）	29
図版5	遺構2（4～6号土坑）	30
図版6	遺構3（7～9号土坑）	31
図版7	遺構4（9～12号土坑）	32
図版8	遺構5（焼土遺構）	33
図版9	遺構6（1・2号溝）	34
図版10	出土遺物1（縄文土器）	35
図版11	出土遺物2（須恵器・陶器・石器）	36

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

中部横断自動車道は、国土交通省の「新直轄方式区間」約28km（南部町を起点として市川三郷町の旧六郷町宮原地区まで）と中日本高速道路株式会社の「有料道路方式区間」（宮原地区から双葉ジャンクションまでの区間）によって計画が進められてきた。有料道路区間については、既に双葉ジャンクションから増穂町インターまで完成されており、今後増穂インターから宮原地区までが計画されている。

新直轄方式区間である市川三郷町から南部町については、平成19年2月に計画路線内の現地踏査を実施した。区間内では、トンネルや切り盛り土、高架橋などが建設予定されているため、路線内をほぼ忠実に踏査を行った。しかし、山林がほとんどであったため落ち葉などが多く、遺物などの発見には至っていない。

現地踏査は、このような状況であったため、遺跡分布図及び地形等を考慮しながら実施し、試掘調査を必要とする場所については、報告書を国土交通省へ提出した。南部町地内では、南部インター建設事業があり、国土交通省による用地の取得後、県学術文化財課に試掘調査が依頼された。

第2節 調査までの協議と調査経過

埋文センターは、平成20年6月16日から20日までの5日間、中部横断自動車道南部インター建設予定地である14,000m²内の約365m²を対象に試掘調査を実施した。その結果、慈眼寺東側の約1,600m²の範囲で縄文時代の遺構や遺物がみつかり、字名を付して「寺前遺跡」とした。発掘調査（以下、本調査という）に向けて国土交通省甲府河川国道事務所と学術文化財課との協議が進んで行く中で、中部横断自動車道の本線工事及び南部インター建設に速やかに着手するため、緊急に本調査の対応が必要となった。

平成20年8月4日、国土交通省甲府河川国道事務所、学術文化財課および埋文センターを交え、本調査のため現地協議を行った。調査対象敷地内にある家の移転、調査範囲、駐車場、プレハブの設置および廃土置場などについて協議し、10月より本調査を実施することになった。

本調査は、10月14日から11月19日まで重機による表土掘削を実施した後、人力による遺構確認を行った。確認後、遺構掘削、図面作成、遺構写真、空中撮影を実施した。寺前遺跡の本調査終了後は、中部横断自動車道建設事業に伴う試掘確認調査を同じく南部町内で実施した。

以下に、一連の経過を記す。

試掘調査

平成20年1月9日 試掘調査に関する現地協議を国土交通省・学術文化財課を交え実施

2月18日 南部IC予定地内において2月18日～20日・3月7日の日程で試掘調査を開始

茶畠（寺前遺跡地内）で遺構がみつかり、当該地内の茶の木の抜木後に再度試掘調査が必要であることが報告された

平成20年5月2日 試掘報告を受け、再度試掘調査に関する現地協議を国土交通省・学術文化財課と実施

6月16日 南部IC予定地内において6月16日～20日の日程で試掘調査を実施

茶畠部分（寺前遺跡）で本調査の必要性が確認された

教理文第163号にて文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の報告を提出

6月24日 教理文第163号-2にて文化財保護法第97条第1項に基づく遺跡発見通知の提出、

教理文第163号-3にて文化財保護法第100条第2項に基づく発見通知を提出

本調査

- 平成20年8月4日 本調査についての現地事前協議実施
10月9日 作業員面接
10月14日 現地へ機材を搬入
10月15日 10月22日まで重機による表土掘削
教埋文第460号にて文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の報告を提出
10月17日 安全管理点検日
10月27日 調査区内に測量杭設置
11月17日 安全管理点検日
11月18日 空中撮影及び慈眼寺裏の試掘確認調査実施
11月19日 寺前遺跡の基本土層図作成と土坑の埋戻しを行ない、本調査終了
慈眼寺裏の試掘確認調査終了、原間・大神遺跡の試掘確認調査開始
12月2日 原間遺跡及び大神遺跡の試掘確認調査終了
12月3日 器材の洗浄など撤収作業
12月9日 プレハブ撤収、寺前遺跡本調査及び試掘確認調査終了
12月10日 教埋文第583号にて文化財保護法第100条第2項に基づく発見通知を提出
12月17日 教埋文第609号にて発掘調査終了報告を提出
- 平成21年1月7日 整理作業開始
2月5日 教埋文第683号にて実績報告を提出
3月31日 20年度の整理作業終了
4月2日 21年度の整理作業開始
10月1日 入校
12月25日 刊行

第3節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 新津健 次長 小野正文 調査研究課長 小林広和

調査担当者 山本茂樹・上原健弥

発掘調査作業員 佐野欣二、佐野政紀、佐野正之、坂主範子、小沢利一、遠藤重子、寺田美智子、仲澤清祥、仲澤昇子、望月久夫、望月広子、大庭良子

*この調査組織にて、中部横断自動車道（南部区間）建設事業に伴う試掘確認調査を次の地点でも実施した。

1 南巨摩郡南部町中野4171番地ほか（慈眼寺裏） 平成20年11月18、19日

2 南巨摩郡南部町本郷字原間309番地ほか（原間遺跡） 平成20年11月19日～12月3日

3 南部町本郷字上大神366番地ほか（大神遺跡） 平成20年11月19日～12月3日

整理作業 山本茂樹・上原健弥

*整理作業については、遺構数や出土遺物が少なかったことから、当該年度に担当者が遺物の整理や遺構のトレース、図版組、原稿執筆などを行った。なお、遺跡の全体図や空中撮影については、業務委託で対応した。20年度事業の残務については、21年度に継続し5月まで実施した。

第2章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

寺前遺跡は、山梨県の最南端に位置する南巨摩郡南部町中野地内に所在し、標高は157mである。県庁所在地の甲府からは南へ約60kmの所にあり、平均気温は15度と温暖で降水量が多く、お茶の産地としても有名で風光明媚な場所である。町の西側には、標高1,719mを測る十枚山や1,394mの篠井山などの山梨県南西部と静岡県北部をまたがる身延山地、東に1,030mの思親山などの天子山地に挟まれる。そして、そのほぼ中央に富士川が流れ、山に開まれた南部町は、町の約9割が森林地帯である。

JR身延線は、富士山と赤石山脈に挟まれた富士川の左岸を走り、南部町区間は特に山岳の路線である。そして、身延町を過ぎ市川三郷町へと続きここまで富士川の左岸を通過することとなる。中部横断自動車道の新直轄区間は、市川三郷町から南部町の約28kmである。特に、富士川を横切るまで山岳であるため、トンネルや切り土などの工法で検討がなされている。

第2節 歴史的環境

南部町は、平成15年に南部町と富沢町が合併してできた町名であり、県内ではこの地域を含めて峠南と呼ばれている。本遺跡のある南部町は、国道52号線やJR身延線が通る町で、山梨県と静岡県とを結ぶ交通の要衝となっている。往時は富士川舟運の港町として、また駿州往還の宿場町として山梨県と静岡県の各地との交流が行われる中で繁栄を極めた。南部は、鍬沢へは9里、岩淵へは9里の中継地点にあり、富士川舟運上の要地として栄えてきた町でもある。本町は、奥州に勢力を誇り一時代を築いた南部氏発祥の地として歴史のある町でもある。

旧南部町内での遺跡は、現行の遺跡台帳で51遺跡となっており、その内訳は、旧石器時代が1、縄文時代が17、古墳時代が1、奈良・平安時代が2、中世・近世が35となっている。そして寺前遺跡が新たに加わり52遺跡となった。また、旧富沢町内では県の遺跡台帳によると51遺跡が明らかとなっており、その内容については、旧石器時代が7、縄文時代が36、弥生時代が3、古墳時代が2、古代から中世にかけては18、近世が7となっている。これらの中で時代が重複する遺跡もあるが、南部町全体での遺跡総数は、103となった。

本遺跡が存在する中野地区では、4遺跡が周知化されており、谷を挟んだ南の台地には中・近世の清水原遺跡が、北には縄文時代の北原遺跡、和田原遺跡がある。特に、本遺跡の南に位置する本郷地区では、縄文時代を中心とした大集落が想定される原間遺跡が存在している。多くの遺物が表採され地元でも有名なこの遺跡は、現在お茶畑となっている。この原間遺跡には、同じく縄文時代の遺跡である大神遺跡が隣接している。

遺跡が分布している場所は、富士川沿岸とその支流に面する地域で河岸段丘上に存在する。

南部町福士にある真籬城跡は、戦国時代の城郭で県史跡に指定されている。また、万沢地内には天神堂遺跡が存在しており、旧石器時代の遺物も確認され、町の史跡として指定されている。なお、旧石器時代の遺物については、県の考古資料として平成16年5月6日に1,034点が指定を受けている。

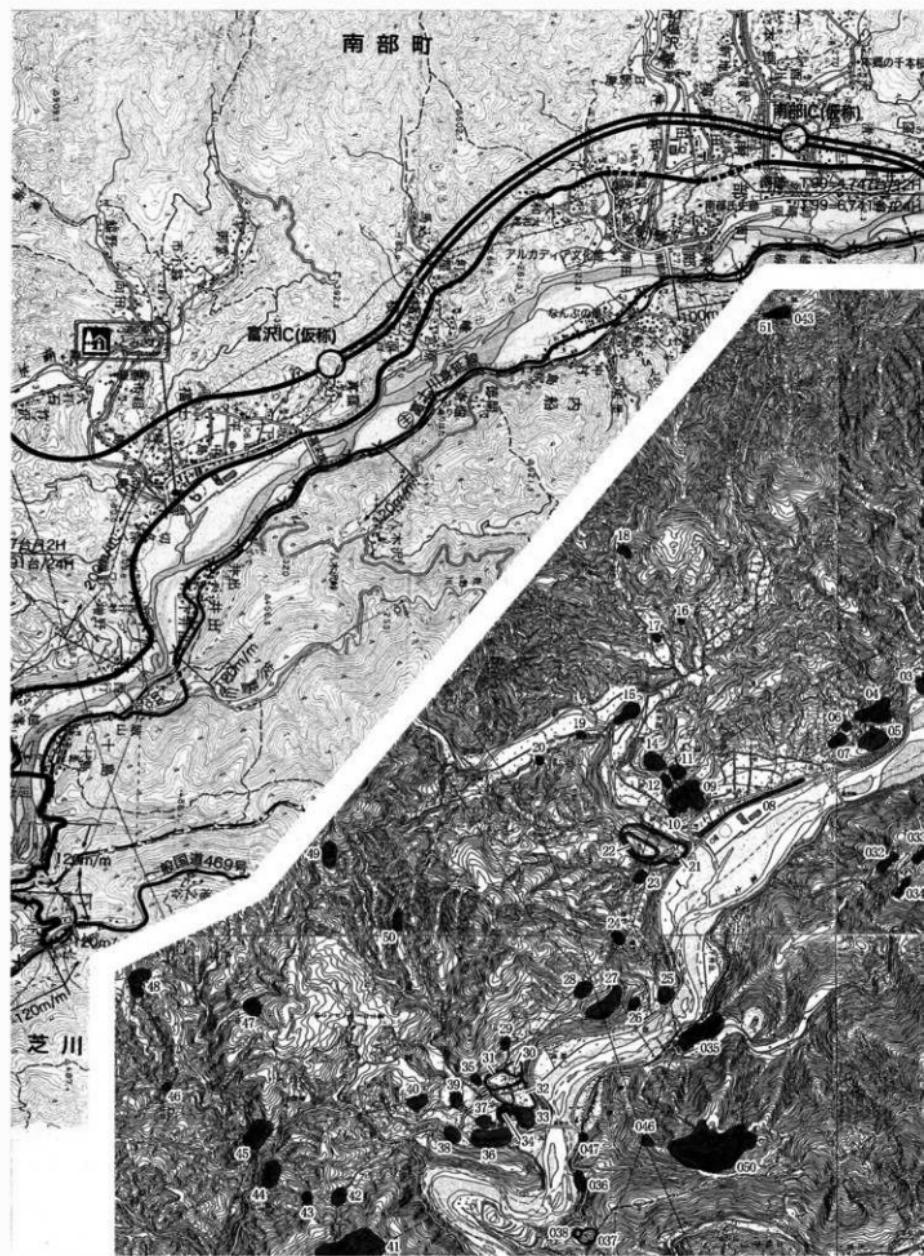
今回、寺前遺跡の発掘調査後に、中部横断自動車道建設工事計画に基づき、用地の取得された原間遺跡と大神遺跡を合わせて12,000m²の試掘確認調査を実施した。その結果、原間遺跡においては、縄文時代前期から後期にかけての土器片が採取され、遺構が確認されたことにより本調査実施の必要性を国土交通省へ報告した。

南部町の遺跡地名一覧表（旧南部町）（南部町誌より）

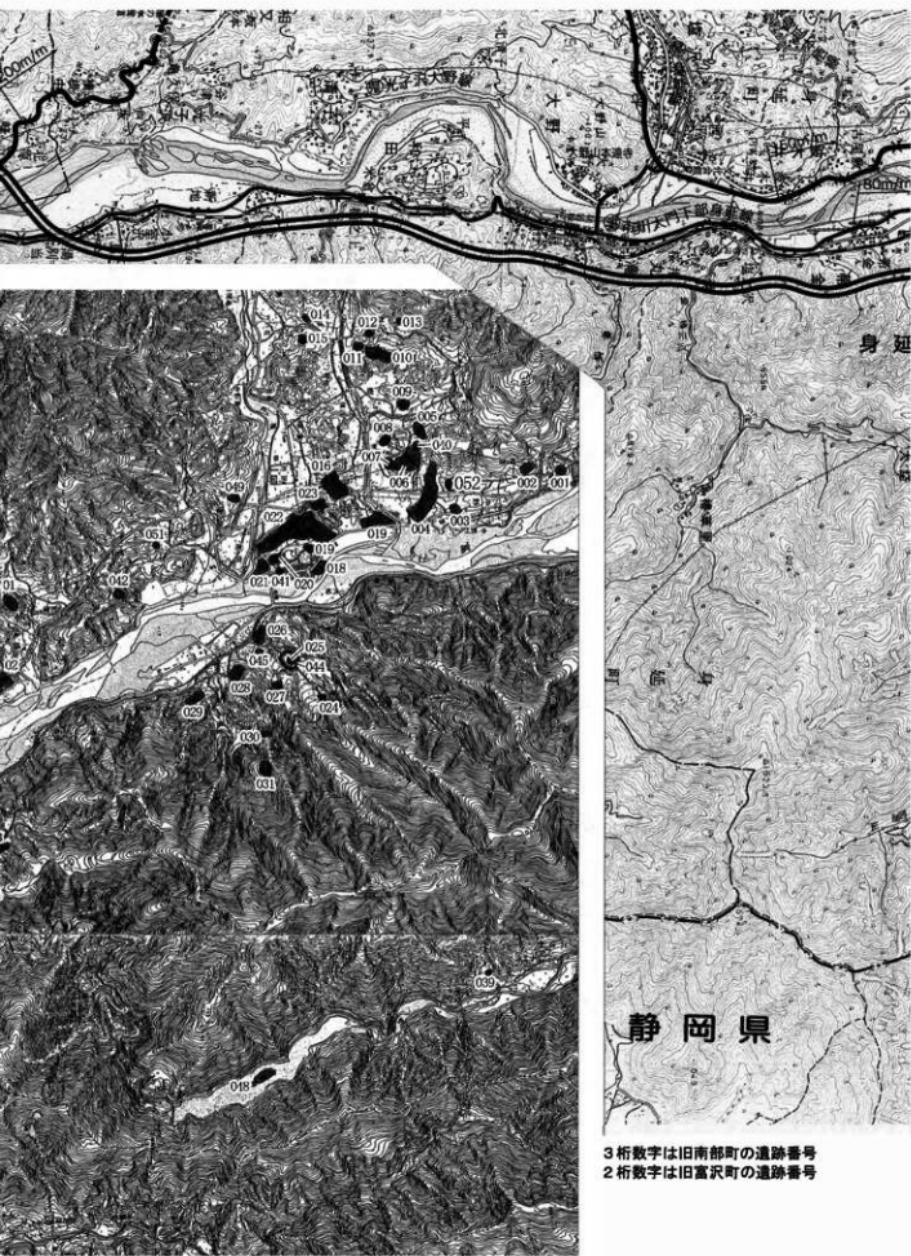
番号	遺跡名	所在地	時代	備考
001	北原	中野字北原1301他	縄文・近世	
002	和田原	中野字和田原1575-1他	縄文	
003	石塚	中野字古塚2881他	近世	
004	清水原	中野字清水原4812他	中世・近世	
005	上原廻	本郷字上原廻1341他	旧石器・縄文	
006	原間	本郷字原間309他	縄文・古墳・平安	
007	大神	本郷字上大神366他	縄文	
008	治家廻寺	本郷字治家366他	近世	
009	妙円寺跡	本郷字小川4140他	近世	
010	臺の城跡	本郷字矢ヶ7768他	中世	
011	法泉寺	本郷字下杉原8062他	近世	
012	上杉尾	本郷字上杉尾7970-2他	縄文？	
013	矢下	本郷字矢下385他	石塚	
014	富ヶ谷	成島字富ヶ谷3406他	近世	
015	上の山	成島字山峯9232他	縄文	
016	坂本	南都字坂本6019他	中世・近世	墳墓群
017	御殿原	南都字御殿原7521他	縄文・中世・近世	
018	南部氏鉢跡	南都字南部8245-2他	中世	
019	上ノ山	南都字上の山8647他	中世	
020	追平跡	南都字上の山8832-1他	中世・近世	
021	追平	南都字追平9030他	縄文	消滅
022	城山	南都字上の山8899他	中世	
023	古城山	南都字古城山6218他	中世	
024	富岡	内船字富岡3379他	近世	
025	寺跡	内船字寺跡3599他	縄文	
026	馬場道上	内船字馬場道上1他	縄文	
027	宝生	内船字宝生5580他	近世	
028	宇上	内船字宇上7273他	縄文	
029	中尾	内船字中尾9911他	中世・近世	
030	倉ヶ平	内船字下倉ヶ平6045他	中世？	
031	倉ヶ平東	内船字上倉ヶ平5859他	近世	
032	札鳥	井出字札鳥2278他	縄文	
033	東八木沢	内船字東八木沢12907他	縄文	八木沢A
034	東畠	井出字東畠2611他	縄文	八木沢B
035	井出城山	井出字城山2960他	中世	烽火台
036	上の段	十島字上の段2285他	縄文	
037	葛谷跡	十島字跡2329他	中世	消滅
038	葛谷延継坂	十島字延継坂1868他	近世	-一石経産消滅
039	大越山	佐野字大越山1610他	中世	
040	原間経家	本郷字原間329-5他	近世	
041	木戸跡	南都字西木戸8491他		
042	降ヶ森	大和字降ヶ山2804他		
043	櫛井山經坂	成島字大坂654他		
044	四条丘原敷	内船字寺堀3599他		
045	地頭原敷	内船字矢都5359他		
046	東の通見・西の通見	十島字東久保1499他		
047	十島字通見	十島字の通341他		
048	佐野丘原敷	下佐野字東山940他	天子湖内	
049	後原	塙沢字後原681他	縄文	
050	十島金山	十島字間瀬之内2007他		
051	蘿戸	大和字吉田1165他	縄文	
052	寺前	中野字寺前4137他	縄文・中世	消滅

第1表 遺跡地名一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
01	神之木	櫛根字神之木	縄文	
02	原戸北	鳴根字幡谷戸	縄文	
03	原戸南	櫛根字豊原	縄文	
04	真籠城跡	櫛根字真籠	中世	城郭
05	真籠	櫛根字真籠	縄文	
06	前田	櫛根字真條	縄文	
07	仲間	櫛根字真禪	縄文・中世	
08	平田堤防跡	櫛根字平	近世・近代	堤防
09	峯	櫛根字峯	縄文	
10	亀割	櫛根字矢島	縄文・先史～古墳	
11	水代	櫛根字峯	旧石器・縄文	
12	天来山	櫛根字峯	旧石器・縄文・弥生・平安	
13	八幡平	櫛根字峯	旧石器・縄文	
14	峯経塚	櫛根字峯	中世？	塚
15	金星山番跡	櫛根字宮部	中世	城郭
16	市小路	櫛根字市小路山	縄文	
17	向田	櫛根字向田	中世・近世	
18	鶴野	櫛根字鶴野	中世・近世	
19	火打石	櫛根字火打石	中世・近世	
20	竹の沢	櫛根字竹の沢	中世・近世	
21	切久保熱状 豊原群	櫛根字切久保原・ 矢島川向	中世	城郭？
22	向島	櫛根字切久保原	縄文	
23	切久保	櫛根字切久保	旧石器・縄文	
24	増野	万沢字増野	縄文	
25	上平	万沢字上平	縄文	
26	西行	万沢字西行山	縄文	
27	天水	万沢字天水	縄文	
28	赤坂	万沢字赤坂	縄文	
29	横沢	万沢字横沢	縄文	
30	猪原	万沢字猪之原	縄文	
31	天神堂	万沢字天神堂	旧石器・縄文・古墳・平安	
32	神の久保	万沢字神の久保	縄文	
33	北原	万沢字北原ほか	縄文	
34	御屋敷	万沢字御屋敷	縄文・中世	
35	金昌福神社	万沢字松山	旧石器・縄文	
36	中尾	万沢字中尾	縄文・平安	
37	古御所	万沢字古御所	縄文・中世	
38	平山	万沢字平山	縄文	
39	相久保	万沢字相久保	縄文	
40	權現堂	万沢字權現堂	旧石器・縄文	
41	白鳥山跡	万沢字白鳥山	中世	城郭
42	下柳沢	万沢字柳沢	近世	
43	境川	万沢字境川	弥生・中世	
44	島尾是倍推定地	万沢字境川	中世？	城郭？
45	島尾尾推定地	万沢字境川	中世？	城郭？
46	日向	万沢字日向	縄文	
47	杉山	万沢字杉山	縄文	
48	中沢	万沢字中沢	縄文	
49	大城	万沢字大城沢	縄文	
50	登尾	万沢字登尾	縄文	
51	櫛井山經坂群	櫛根	平安→鎌倉・近世	縄文



第1図 中部横断自動車道路線図（平成18年4月）及び南部町内の遺跡分布図（1/50,000）



3桁数字は旧南部町の遺跡番号
2桁数字は旧富沢町の遺跡番号



第2図 寺前遺跡位置図（地形図1/25,000・工事図面（1/1,000）

第3章 調査の方法と基本層位

第1節 調査の方法

1. 調査区の規模

発掘調査は、東西65m、南北25mほどを測る約1,600m²が調査対象区域である。このうち、約1,200m²を発掘調査した。

2. 調査グリッドの設定

発掘調査の実施に際し、国土座標に基づく5mグリッドを設定した。基準杭については、北東隅の杭から南へアラビア数字で1・2・3・4の順に付し、その南北ラインから西のラインごとに5・6・7と順に付した。なお、グリッドの呼称については、4点の基準杭で囲われたグリッド南西の基準杭の名称を充てた。

3. 表土層の除去

調査区域は、主にお茶畠として利用されていた土地であり、畑の耕作土である黒色の表土層（基本層位のⅠ層）及び樹根の影響が大きく遺構確認が困難であった暗茶褐色土層（基本層位のⅡ層）を重機で掘削、除去した。掘削深度は、およそ30~50cmであったが、調査区南西部分に建っていた住宅基礎の盛土部分や東南部に確認された谷状の落ち込み部分では1m程を除去している。

4. 表土層除去後の調査

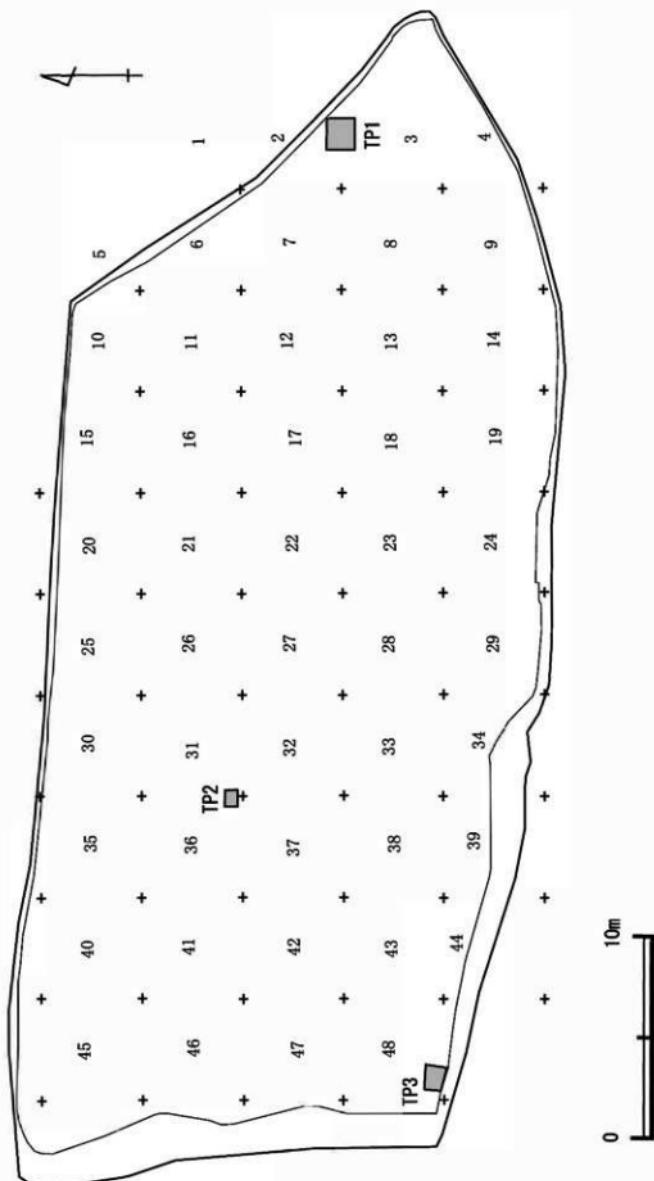
褐色土層（基本層位のⅢ層）以下の掘り下げは人力で行ない、遺構や遺物の検出に努めた。表土層の掘削後、調査区域内に大きな傾斜が確認されたため、グリッドにとらわれず地形や土層堆積を考慮し、適宜セクションベルトを設定して調査を進めた。また、各遺構については土層断面図、平面図、エレベーション図を作成し、遺跡全体図の作成では航空写真測量を実施した。出土遺物は、出土点数が少なかったことから、Ⅲ層以下の出土物は原則として全て位置を記録し図化した。

第2節 基本層位

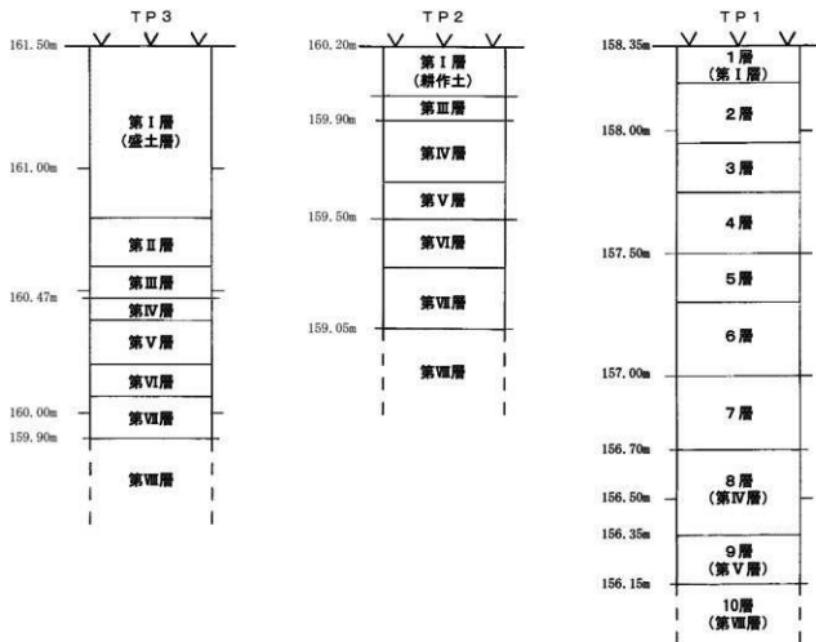
調査区域は、西端部分ではほぼ平坦となるものの、全体に西から東（富士川の方角）への傾斜がある。また、調査区中央部から南東へかけては東西方向に谷状の落ち込みが確認された。こうした傾斜がみられる調査区内の基本土層は、3ヶ所に設定したテストピット（東から順にTP1、TP2、TP3）から作成した。TP1は谷部の一番低地部分に、TP2は試掘調査の深掘り部分で、調査区中央よりやや西よりの勾配が強くなりはじめるとおり、TP3はほぼ平坦な地点にあった擾乱部分（浄化槽跡）を利用して設定した。ただし、TP2は試掘によってⅢ層以上が消失していたため、このすぐ北側に位置しⅣ層の標高が変わらない溝状遺構2の北端セクションを参考にしてⅠ~Ⅲ層部分の土層図を作成した。

基本土層のⅠ層は、TP1とTP2においては黒色の耕作土であるのに対して、宅地部に位置するTP3は宅地用の盛土がこれに該当する。TP2とTP3は、Ⅲ層以下の土層が同じであるが、TP1は谷部の落ち込み部分ということもあり堆積土が厚く、また土層の対応関係の把握が困難であったことからアラビア数字による表記とし、対応するものについてはカッコ内に示した。ただし、土層の色調等から2~5がⅡ層に、6~7層がⅢ層に概ね比定される。各ピットで共通する堆積土は、白色で安山岩質の礫が含まれる自然堆積層のⅣ層である。礫は、TP2とTP3では1~10mmと小石程度であったが、調査区中央部より東側では5~10cmほどの大きさであった。ただし、この礫は調査区全体のⅣ層に含まれるものではなく、主に東側でみられた。また、同様の礫はⅢ層中にも顕著にみられた。

各ピットのⅣ層を比較すると、TP3とTP2で0.6m、TP3とTP1で3.8m近くの比高差がある。Ⅲ層でも、TP3とTP2で0.9m、TP3とTP1で3.8m近くの比高差があり、東へ大きく傾斜していることがわかる。



第3図 グリッド設定図



第4図 基本土層図と土層注記 (S=1/20)

基本土層 (T P 3・T P 2)

I層 黒色土	耕作土／莎草河や砂を含む住宅土
II層 暗褐色土	粘性弱い、しまりあり、1-2 ^t 赤色粒子あり、1 ^t 黄色粒子あり、1 ^t 黑色粒子あり 1 ^t 白色粒子少量、炭化物の混入あり
III層 暗褐色土	粘性あり、しまりあり、1-2 ^t 赤色粒子少量、1 ^t 黄色粒子あり、1-2 ^t 白色粒子あり
IV層 暗茶褐色土 (透視確認面)	地山層、粘性あり、しまり強い、1 ^t 赤色粒子多量、1 ^t 黄色粒子少量、1 ^t 黑色粒子少量 1-5 ^t 青灰色粒子やや多い、1-2 ^t 白色粒子多量、5-10 ^t 小石少量
V層 暗黄褐色土	地山層、粘性やや強い、しまり強い、1 ^t 白色粒子少量、1 ^t 黄色粒子少量、1 ^t 黑色粒子少量 1-5 ^t 青灰色粒子やや多い、1-2 ^t 白色粒子多量、5-10 ^t 小石少量
VI層 黄褐色土	地山層、粘性強い、しまり強い、1 ^t 赤色粒子多量、1 ^t 黄色粒子少量、1-5 ^t 青灰色粒子やや多い 1-2 ^t 白色粒子多量、5-10 ^t 小石少量
VII層 明黄褐色土	地山層、粘性強い、しまり有り、1-5 ^t 青灰色粒子多量、1-5 ^t 白色粒子多量、1cm小石多量
VIII層 明黃褐色土	地山層、粘性あり、しまり有り、1-5 ^t 青灰色粒子多量、1-5 ^t 白色粒子多量、1-10cmの礫多い

谷部の土層 (T P 1 : 調査区東端壁部分)

I層 黒色土	I層 (耕作土)
2層 暗褐色土	粘性弱い、しまりやや弱い、1-2 ^t 赤色粒子多量、1-2 ^t 黄色粒子多量、1-2 ^t 黑色粒子多量 1-2 ^t 白色粒子多量、1cm大的の礫あり、根の影響強い
3層 暗褐色土	粘性やや弱い、しまり有り、1-3 ^t 赤色粒子多量、1-3 ^t 黑色粒子多量、1-3 ^t 白色粒子多量
4層 黑色土	粘性弱い、しまり弱い、1-2 ^t 赤色粒子少量、1-2 ^t 白色粒子少量、1-3 ^t 黑色粒子あり 1cm大的炭化材多い
5層 暗褐色土	粘性弱い、しまり弱い、1-2 ^t 赤色粒子少量、1-2 ^t 白色粒子少量、1-3 ^t 黑色粒子あり 1cm大的炭化材多い
6層 黑色土	粘性あり、しまり有り、1-2 ^t 赤色粒子微量、1-3 ^t 白色粒子あり、1-3 ^t 黑色粒子あり 1cm大的炭化材多い、1cm大的小石少量
7層 黑色土	粘性あり、しまり有り、1-2 ^t 赤色粒子少、1-2 ^t 黑色粒子少、1-2 ^t 白色粒子あり 炭化材含む、1cm大的の礫あり
8層 暗茶褐色土	IV層 (地山層)
9層 暗黄褐色土	V層 (地山層)
10層 明黄褐色土	VII層 (地山層)

第4章 検出された遺構と遺物

第1節 土坑について

調査した土坑は、総計12基で、調査区の東半分に土坑の広がりが認められる。

1号土坑（遺構：第5図）

（遺構）本遺跡のはば中央に位置する。径138cmで、深さは26cmを計測する。形状は、円形を呈する。坑底には小さな穴が認められるが、お茶烟であったことによる根の擾乱と思われる。

（遺物）出土遺物なし

2号土坑（遺構：第5図、遺物：第9図-1）

（遺構）1号土坑の北東に位置する。長辺300cm、短辺115cmで、深さは7.8cmを計測する。形状は、長方形を呈し、南北方向に長辺を有する。坑底は、凹凸である。

（遺物）覆土中より陶器片（常滑）が1点出土している。大甕の肩部で、灰釉（自然釉）が全体に付着している。外面には、ヘラによる調整痕がみられる。

3号土坑（遺構：第5図）

（遺構）2号土坑の南東に位置する。長径157cm、短径142cmで、深さは50.3cmを計測する。形状は、ほぼ円形を呈する。1号土坑と同様に坑底には小さな穴が認められるが、根による擾乱と思われる。

（遺物）土坑覆土中より2点の繩文土器が出土した。2点とも摩耗が激しい小破片で、時期は不明である。

4号土坑（遺構：第5図）

（遺構）3号土坑の東に位置し、5号土坑と6号土坑に挟まれる。長径126cm、短径93cmで、深さは33.4cmを計測する。形状は、楕円形を呈し、ほぼ東西方向に長辺を有する。

（遺物）出土遺物なし

5号土坑（遺構：第6図）

（遺構）4号土坑の北に位置する。長径140cm、短径136cmで、深さは44.4cmを計測する。形状は、ほぼ円形を呈する。土坑の半分上は、掘りすぎのためにできた段差である。

（遺物）出土遺物なし

6号土坑（遺構：第6図）

（遺構）4号土坑の南に位置する。長径118cm、短径96cmで、深さは19.5cmを計測する。形状は、ほぼ円形を呈する。本土坑も坑底には小さな穴が認められるが、根による擾乱と思われる。

（遺物）出土遺物なし

7号土坑（遺構：第6図）

（遺構）3号土坑と1号土坑に挟まれる。長径208cm、短径146cmで、深さは105.7cmを計測する。形状は、楕円形を呈し、北東から南西方向に長辺を有する。本遺跡の中では一番深い土坑である。

（遺物）出土遺物なし

8号土坑（遺構：第6図）

（遺構）10号土坑の南に位置する。本土坑は重複関係にあり、新しい土坑の方が規模は大きく、残存している箇所で長径134cm、短径110cm、深さは10cmを計測する。形状は、隅丸方形を呈する。古い土坑の規模は、残存している箇所で長径79cm、短径67cm、深さは20cmを計測する。形状は、円形を呈する。

（遺物）出土遺物なし

9号土坑（遺構：第7図）

（遺構）10号土坑の西に位置する。試掘調査の段階で確認された土坑であるが、調査の結果、本土坑と風倒木痕の重複が認められた。しかし、新旧関係については明らかではない。第5図の平面図から、遺構の北端に一段深くなった箇所が土坑である。形状は長方形を呈し、深さは63.5cmを計測する。風倒木痕は、長径320cm、短径190cmである。形状は、不整円形を呈する。

（遺物）出土遺物なし

10号土坑（遺構：第7図、遺物：第9図-2）

（遺構）9号土坑の東に位置する。長径224cm、短径155cmで、深さは96cmを計測する。形状は、梢円形を呈し、ほぼ東西方向に長径を有する。

（遺物）2は、試掘調査時に覆土中（試掘14トレンチ第2号竪穴跡）よりみつかっている。摩耗が激しいが、深鉢胴部の破片である。把手部分が一部残っており、磨消繩文が施文されている。繩文時代後期初頭に比定される。

11号土坑（遺物：第9図-3～6）

（遺構）本遺跡の最東端に位置する。本土坑は、9号土坑と同様に風倒木痕である。

（遺物）埋土中からは、土器片3点、石器2点が出土している。3は、繩文時代中期末に比定される深鉢胴部片で、縁帯で区画された右部分には繩文が施文されている。4は、繩文時代中期末から後期初頭に比定される深鉢で、胴部屈曲部の直下部分にあたる。もう1点の繩文土器は、同じく繩文時代中期末から後期初頭に比定される無文の深鉢胴部片である。

5の打製石斧は原縫面の残る剥片石器で、基部破損部に剥離調整がされている。6は両端部を両極打法により整形された削器で、先端部から剥離状に破損がみられる。南部町内では、万沢の天神堂遺跡や旧富沢町内で類似した石器の出土事例が報告されている。（参考文献1・2）

12号土坑（遺構：第7図）

（遺構）11号土坑の北西に位置し、浅い谷状の斜面に構築される。斜面に拡がる礫層中で、礫がなかった範囲を遺構と判断して調査した。長径147cm、短径131cm、深さは23.3cmを計測する。形状は、ほぼ円形を呈する。

（遺物）出土遺物なし

第2節 焼土遺構について

焼土遺構は、調査区の北東隅に確認した1基のみである。

焼土遺構（遺構：第8図）

（遺構）本遺構は、10号土坑の東に位置する。重機による表土掘削の際に、確認された遺構である。形状は不整形を呈し、長径90cm、短径83cm、深さは12cmを計測する。浅い掘り込みの周辺には、小さな焼土が

散布する。本体である焼土造構は、炉跡のような浅い掘り込みが認められるものの、縄文時代の地床炉とは異なったものと思われ、形状については不整形な方形状を呈する。また、この浅い掘り込みを中心として、掘り込みより外に広く焼かれていた痕跡や、周囲に散乱した小さな焼土も認められる。散乱した焼土は、東西方向で3.5m、南北方向で2.5mの範囲に存在する。このような状況から、確認された面が焼土を形成した生活面であったものと判断される。

遺物が伴っていないことから時期は不明であるが、2号土坑から中世の陶器が出土していることから、この時期以降のものではないかと考えられる。

(遺物) 出土遺物なし

第3節 溝について

調査した溝は、総計2条である。溝は、調査区の中央よりやや西に存在し、ほぼ南北に延びる。1号および2号溝の構築時期については、覆土や規模などから同じ頃に造られたものと思われる。

1号溝（遺構：第8図）

（遺構）非常に浅いため途中で消滅する。確認された溝の長さは6.30m、幅59～63cm、深さは3～4cmを計測する。確認面は、現在の表土上面から約50cmと浅かったことから、擾乱をかなり受けたものと思われる。また、この溝については、お茶畠に付属する施設ではない（お茶の耕作者の方から教えを受けた）ことが明らかにされており、中世から近代にかけて構築されたものと思われる。覆土は、粘性やしまりのある暗褐色土である。

(遺物) 出土遺物なし

2号溝（遺構：第8図）

（遺構）1号溝の東隣に位置する。確認された溝の長さは17.5m、幅65～70cm、深さは6～10cmを計測する。かなり長い溝であるが、南側では擁壁が構築されていたために破壊されている。覆土は、1号溝と同様である。

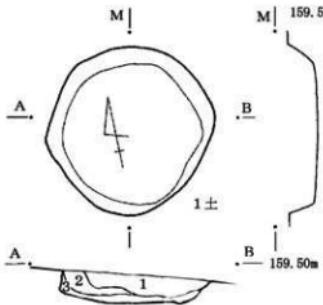
(遺物) 出土遺物なし

第4節 遺構外出土遺物について（遺物：第9図-7～16）

7～14は、谷部の堆積土中より出土したものである。7～9は、いずれも縄文時代中期末から後期初頭に比定される縄文土器で、深鉢頸部片の7は屈曲部の沈線より下方に縄文が施文されている。8は、やや斜めに沈線があり、破片の上部にわずかな屈曲がみられる。9は、摩耗によりうっすらとではあるが竪方向の沈線が1条確認できる。10は、縄文時代後期初頭に比定される焼成の良い薄手の深鉢頸部片である。横位に4条沈線がある。11は須恵器の壺で、外面には一部自然釉の付着がみられる。

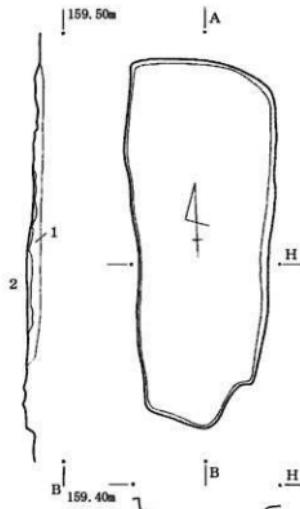
12～14は縄文時代の石器である。12は剥片素材を利用した削器で、両方の長辺に調整剥離痕がみられる。13はその形状から、刃部と基部が折れた打製石斧の未製品である。基部の折れ部には二次加工痕がみられることから、転用した可能性も考えられる。14は、二次加工痕を有する剥片である。

15は、調査区内の緩斜面で出土した縄文土器である。中期末から後期初頭の深鉢形土器片で、縦位の沈線が2条施文されている。表土一括遺物の16は、二次加工痕を有する剥片である。形状から、打製石斧を制作中に刃部側から折れたと考えられる。折れ面には、細かい剥離痕がみられる。



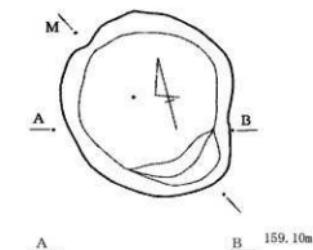
1号土坑

- 1層 暗茶褐色土 粘性弱い、しまりあり、 $1-10^1$ の白色粒子多量、赤色粒子少量、細かな根筋あり
2層 暗褐色土 粘性弱い、しまりあり、 $1-5^1$ の白色粒子あり、 $1-5^1$ の赤色粒子あり
3層 暗褐色土 粘性あり、しまりあり、 $1-5^1$ の赤色粒子少量、 $1-5^1$ の白色粒子少量



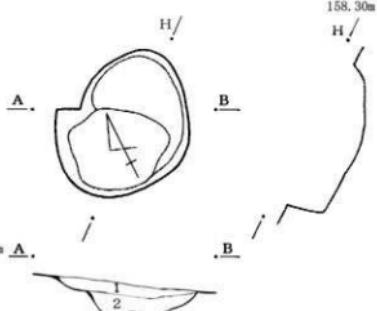
2号土坑

- 1層 暗褐色土 粘性あり、しまりあり、 $1-5^1$ の白色粒子多量、 $1-3^1$ の赤色粒子あり、細かな根筋あり
2層 暗茶褐色土 粘性あり（1層より強い）、しまり弱く、 $1-5^1$ の白色粒子あり、 $1-3^1$ の赤色粒子少量



3号土坑

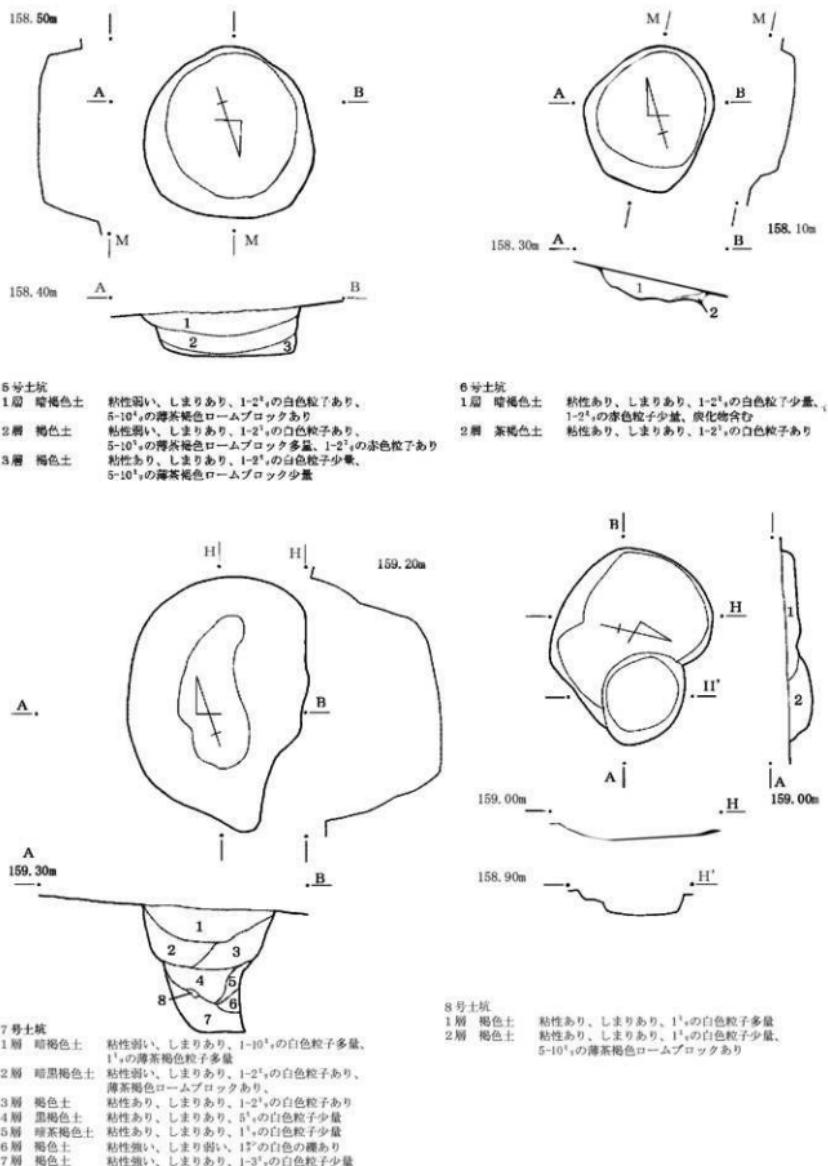
- 1層 暗茶褐色土 粘性弱い、しまりあり、 $1-3^1$ の白色粒子、 1^1 の赤色粒子少量
2層 暗褐色土 粘性弱い、しまりあり、 $1-5^1$ の白色粒子多量、 $1-5^1$ の赤色粒子あり
3層 暗褐色土 粘性あり、しまりあり、 $1-3^1$ の白色粒子少量、 $1-2^1$ の纏少量



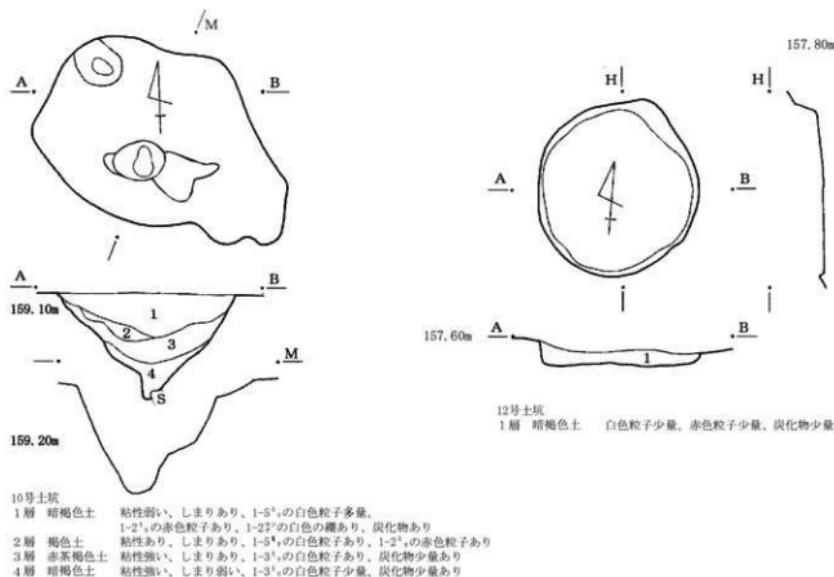
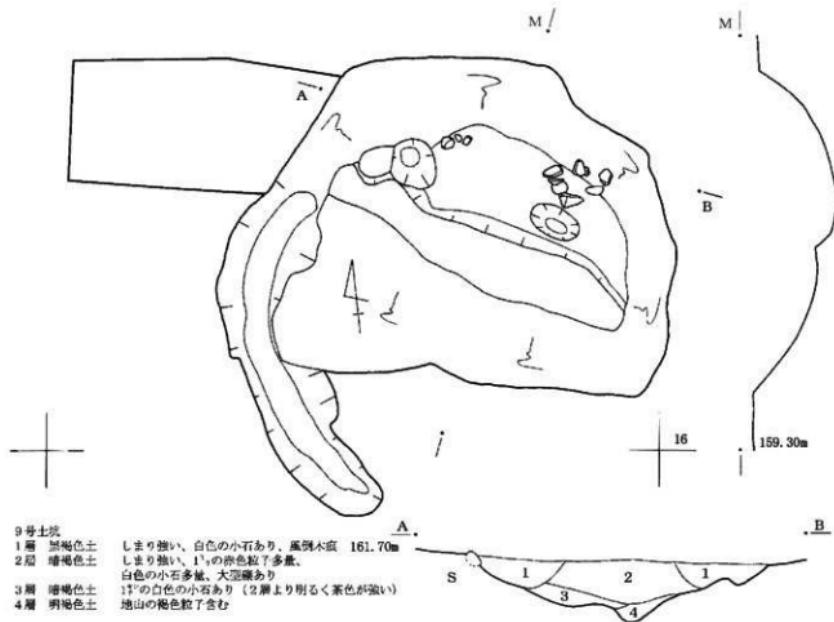
4号土坑

- 1層 暗褐色土 粘性弱い、しまりあり、 $1-2^1$ の白色粒子多量、 $1-3^1$ の赤色粒子あり、炭火物少量
2層 暗茶褐色土 粘性あり、しまりあり、 $1-2^1$ の白色粒子多量、 1^1 の赤色粒子少量

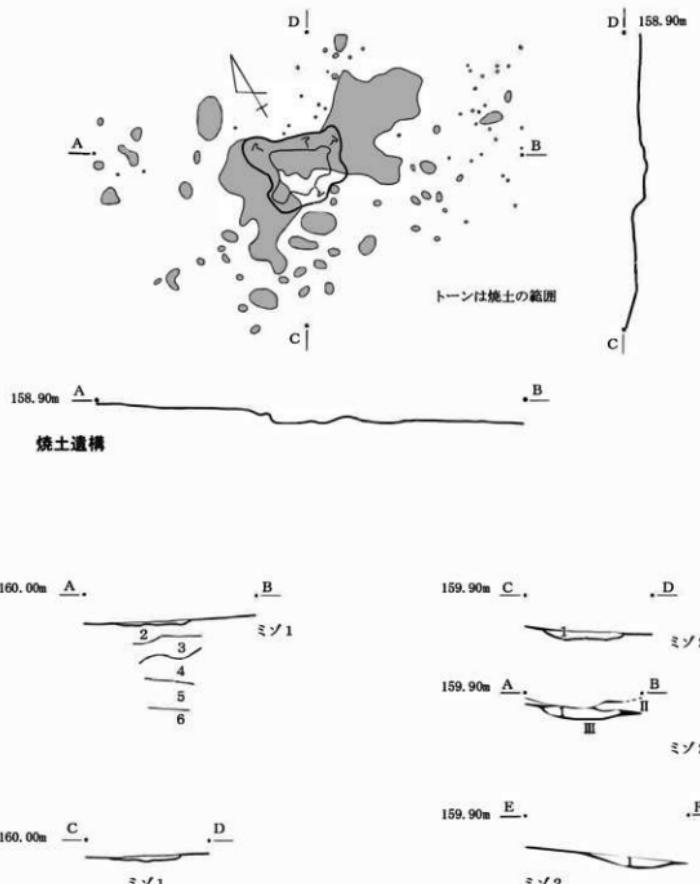
第5図 検出遺構（1～4号土坑）



第6図 検出遺構（5~8号土坑）



第7図 検出遺構（9・10・12号土坑）



1号溝

1号溝 (セクション1・セクション2)

1層 暗褐色土 粘性あり、しまりあり、1-2¹、の白色粒子あり

2号溝

2号溝 (セクション1~3)

1層 黒褐色土 粘性あり、しまりあり、1-2¹、の白色粒子多量、
1¹、の赤色粒子あり、1¹、の薄茶褐色粒子多量

第8図 検出遺構（焼土造構・1～2号溝）

2号土坑



1

10号土坑



2

11号土坑



3



4

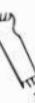


5



6

遺構外（谷部）



7



8



9



10



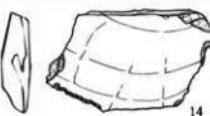
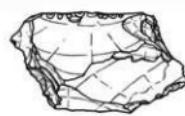
11



12



13



14

遺構外



15

石器類

0 (1:3) 10cm

土器類

0 (1:2) 5cm

一括



16

第9図 出土遺物

第5章 まとめ

第1節 調査成果について

検出遺構について

みつかった遺構は、土坑12基、焼土遺構1基、溝2条であった。12基の土坑の内、2基は風割木跡である。長方形を呈する2号土坑は、遺構覆土中に中世の陶器片（常滑の大甕）があったことから、中世に建立された慈眼寺と何らかの関わりがある遺構である可能性も考えられる。当該時期の遺構と思われる。残り9基の内、3号土坑・10号土坑・11号土坑からは覆土中から縄文土器が出土していることから、縄文時代中期末～後期初頭に位置づけられる遺構と考えられる。また、残りの6基の土坑についても、遺物の出土はなかったものの、検出された土層から縄文時代の遺構と考えられる。

出土遺物について

出土遺物は、縄文土器34点・縄文時代の石器6点・須恵器1点・陶器1点の合計42点で、調査面積に比べ非常に少ない量である（表4・表5参照）。出土遺物の内、縄文土器の多くは、直径1～2cm程の小破片で外面の摩耗が激しく文様の判別すら困難なものであった。しかし、文様が残された遺物やその他遺物の胎土や焼成などから、これらの遺物は縄文時代中期末～後期初頭に比定されるものである。

同じく縄文時代の遺物では、石器が出土している。この内6の削器は、南部町万沢の天神堂遺跡や旧富沢町内の遺跡で類似した石器が出土している。黄色風化泥岩を加工したこの石器は、天神堂遺跡では「撥型器」、上代遺跡や峰遺跡では「ヘラ状石器」として報告されている。これらの石器は、黄色風化泥岩の他、天神堂遺跡では黄色風化頁岩など特定の石材を利用している。他県の事例では、静岡県や神奈川県海岸部の遺跡で特徴的にみられる「段間型兜状石器」があるが、その多くは南部町でみつかっている石器とは多くの異なる特徴をもっていることが指摘されている（保坂 2006）。なお、「ヘラ状石器」は、主に東北以北に出土すると考えられている石器群であり、こうした背景もあり本報告書では削器として報告している。

調査区内の地形と遺構・遺物の分布状況

寺前遺跡の西には小高い山があり、その東側に慈眼寺がある。慈眼寺から東へ向かって緩やかに傾斜し、富士川によって形成された河岸段丘が数段平坦部をもちながら富士川へと下っていく。発掘調査前の地形からは確認することができなかつたが、本遺跡内には小規模な埋没谷が北東から南西方向に入っていることを確認した。谷部最深部と調査区西端部の比高差は約4mにもなる。

同調査区内の遺構分布をみると、調査区東側に偏在しているものの谷部以外の緩斜面部分にも検出されている。また、遺構の全ては谷の北側にみつかっている。一方、出土遺物は埋没谷から今回の調査でみつかった遺物42点の内の40点が出土している。縄文土器については、摩耗が激しく谷流入土中からの出土であり、縄文土器を含む谷部出土遺物の分布は、谷の南側斜面に集中している。このように遺構と遺物の分布状況に違いがみられるが、試掘調査の結果や調査区南西方向に隣接する台地などの地形を考えると、隣接する台地部分には小規模な集落の存在が想定される。

本遺跡調査区内では、谷部を中心として調査区東側に掘り掌大から人頭大ほどの礫の分布がみられた。白色で多孔質なこの石材は、全体に丸みを帯びて加工の跡がみられない。また、出土層が基本土層の、層（地山層）であることから、自然に堆積したものであると考えられる。しかし、同じ層中でも西側ではみつからず、また周辺の試掘調査でも確認されていないことから、これらの礫が堆積した経過には何かしらの自然的要素が介在していたことが推測される。なお、中部横断自動車道建設に関わる地質調査担当者からは、堆積した経過については不明であるとの回答を得た。

参考文献：（財）山梨文化財研究所（編）2004.11『天神堂遺跡－農道上代築建設に伴う発掘調査報告書－』山梨県総務局農務部・南部町教育委員会／保坂康夫 2006.6.11「チャンチャン石」の3万年』『山梨考古』第76号 6-7頁 山梨県考古学協会

第2節 データ一覧（遺構・遺物）

第2表 土坑と焼土遺構の一覧

遺構名	図版番号	位置 グリッド	平面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
1号土坑	第5図	28	円形	138.0	138.0	26.0	—	
2号土坑	第5図	26.27	長方形	300.0	115.0	7.8	中世	第9図-1
3号土坑	第5図	23	円形	157.0	142.0	50.3	縄文中末～後初	縄文土器2点が出土
4号土坑	第5図	13.18	橢円形	126.0	93.0	33.4	—	
5号土坑	第6図	12.13, 17.18	円形	140.0	136.0	44.4	—	
6号土坑	第6図	18.19	円形	118.0	96.0	19.5	—	
7号土坑	第6図	23.28	橢円形	208.0	146.0	105.7	—	
8号土坑小	第6図	16	円形	79.0	67.0	20.0	—	残存部で計測
8号土坑大	第6図	16	隅丸方形	134.0	110.0	10.0	—	残存部で計測
9号土坑	第7図	20	不整形	320.0	190.0	63.5	—	風倒木痕
10号土坑	第7図	15	橢円形	224.0	155.0	96.0	縄文後初	第9図-2が出土
11号土坑	第6図	3	不整形	—	—	—	縄文中末～後初	第9図-3～6、他に縄文土器2点 風倒木痕
12号土坑	第7図	7	円形	147.0	131.0	23.3	—	
焼土遺構	第8図	10	不整形	90.0	83.0	12.0	中世～	

第3表 溝状遺構の一覧

遺構名	図版番号	位置 グリッド	平面形状	長軸 (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	時期	備考
1号溝	第8図	31.32, 36.37	—	6.3	59～63	3～4	中世～近世	
2号溝	第8図	30-33	—	17.5	65～70	6～10	中世～近世	

試掘調査及び本調査での遺構名対応関係は以下の通りである

- | | | |
|---------|---|-------|
| 試掘調査 | → | 本調査 |
| 第1号溝状遺構 | → | 2号溝 |
| 第2号溝状遺構 | → | 1号溝 |
| 第2号竪坑 | → | 10号土坑 |
| 第1号土坑 | → | 8号土坑 |

第4表 土器・陶磁器の一覧

図版番号	グリッド	出土地点	種別	器種	部位	時代・時期	整形技法 (文様)	色調	胎土	注記	備考	
							輪郭	輪郭	輪郭	輪郭		
第9図-1	27	2号土坑	陶器	大壺	肩部	中世	彫刻み、輪郭、(外側) ヘア彫、(内側) 輪郭、沈線	灰オーブ(外) 明赤褐色 明赤褐色	石 長	寺前 2 土-1-H20.11.04 寺前 3 土-2-H20.10.30 寺前 3 土-2-H20.11.5	常滑、自然乾付着 輪郭彫しい	
-	23	3号土坑	土器	-	-	-	-	-	-	-	輪郭彫しい	
第9図-2	15	10号土坑	土器	深鉢	把手	輪文後期物頭	輪文彫文、把手	明赤褐色	石、長、角	寺前試14トレ2号-H20.6.9	輪郭彫しい、試掘資料(出土)	
第9図-3	3	11号土坑	土器	深鉢	把手	輪文中期末	輪文彫文、把手	明赤褐色	石 長・石	寺前No.25-H20.11.14 寺前No.33-H20.11.14	輪郭彫しい	
第9図-4	3	11号土坑	土器	深鉢	把手	輪文中期末、後初	輪文彫文、把手	明赤褐色	石	寺前No.34-H20.11.14	輪郭彫しい	
-	3	11号土坑	土器	深鉢	把手	輪文中期末、後初	輪文彫文、把手	明赤褐色	石 長・石	寺前No.51-H20.10.28	輪郭彫しい	
第9図-7	9	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期末、後初	沙継、条(縞)	にぶい黄褐色	長、石	寺前No.13-H20.10.28	輪郭彫しい	
第9図-8	9	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期末、後初	沙継、条(縞)	褐色	石	寺前No.11-H20.10.28	器底が無地	
第9図-9	9	-	土器	深鉢	颈部	輪文後期物頭	輪文4条(縞)	明赤褐色	石、角	寺前No.25-H20.11.12	焼成度く、薄手の土器	
第9図-10	19	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期末	輪文4条(縞)	赤褐色	石 黒(外)/灰(内)	寺前No.31-H20.11.12	輪郭彫しく、表面削落	
第9図-11	2	-	須恵器	深鉢	颈部	輪文中期	輪文4条(縞)	黒(外)/灰(内)	石 黒(外)/灰(内)	寺前No.11-H20.10.28	輪郭彫しく、表面削落	
-	3	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期代	-	明赤褐色	石	寺前No.21-H20.10.28	輪郭彫しく、表面削落	
-	3	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期代	-	明赤褐色	石	寺前No.3-H20.10.28	輪郭彫しく、表面削落	
-	4	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期代	-	褐色	石、雲	寺前No.19-H20.10.28	輪郭彫しく、表面削落	
-	7	-	土器	-	口縁?	輪文中期代	-	明赤褐色	石、角	寺前No.21-H20.10.28	輪郭彫しく、表面削落	
-	7	-	土器	-	口縁?	輪文中期代	-	明赤褐色	石、角	寺前No.21-H20.10.28	輪郭彫しく、表面削落	
-	8	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期代	-	明赤褐色	石	寺前No.36-H20.11.14	輪郭彫しく	
-	9	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期、後期	無文	明赤褐色	石、長	寺前No.14-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	9	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期代	-	明赤褐色	石、長	寺前No.15-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	9	-	土器	-	-	輪文中期代	-	褐色	石	寺前No.16-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	9	-	土器	-	-	輪文中期代	-	明赤褐色	石	寺前No.17-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	9	-	土器	-	-	輪文中期代	-	明赤褐色	石、長	寺前No.6-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	9	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期代	-	赤褐色	石	寺前No.7-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	9	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期代	-	にぶい褐色	石 褐色	寺前No.8-H20.10.28	輪郭彫しく、表面一部変色	
-	9	-	土器	-	-	輪文中期代	-	明赤褐色	石	寺前No.9-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	9	-	土器	-	-	輪文中期代	-	明赤褐色	石	寺前No.10-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	19	-	土器	-	-	輪文中期代	-	明赤褐色	石、長、雲	寺前No.18-H20.10.28	輪郭彫しく	
-	19	-	土器	-	-	輪文中期代	-	明赤褐色	石、長、角	寺前No.25-H20.11.12	輪郭彫しく	
-	23	-	土器	-	-	輪文中期代	-	明赤褐色	石	寺前No.24-H20.11.12	輪郭彫しく	
-	24	-	土器	-	-	輪文中期代	-	褐色	石、角	寺前No.23-H20.11.12	輪郭彫しく	
-	31	-	須恵器	碗	颈部	近代	コバルト、印押(織部)	白色	石	寺前試13トレ号-H20.6.9	試掘資料(2号測付近の耕作土中)	
第9図-15	38	-	土器	深鉢	颈部	輪文中期末、後初	沙継2条(縞)	明赤褐色	石、長	寺前No.22-H20.11.06	輪郭彫しい	
-	一括	-	土器	-	-	輪文時代	-	明赤褐色	石、長	寺前義士一括-H20.11.20	輪郭彫しい	

上記表の凡例

時期：中末は「中期末」、後初は「後期初頭」

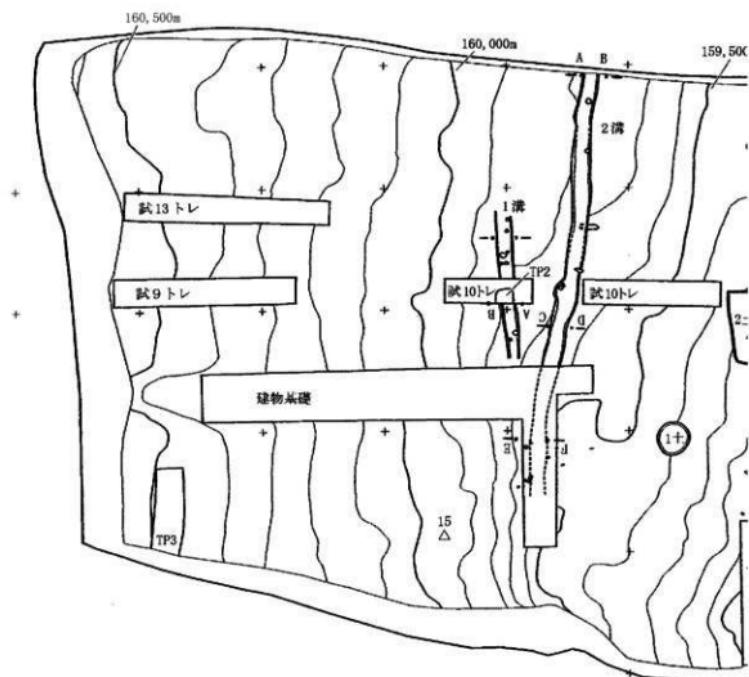
胎土：石=石英、長=長石、角=角閃石、雲=金雲母

第5表 石器の一覧

図版番号	出土地点 グリッド	遺構	器種	素材	石材	色調	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (g)	注記	備考
第9図-5	3	11号土坑	打製石斧	剥片石器	砂岩	灰色	113.5	62.0	181.6	寺前No.29+20.11.12	基部破損
第9図-6	3	11号土坑	削器	砾石器	黄色風化泥岩	黄褐色	115.0	66.5	137.8	寺前No.30+20.11.12	先端部側より破損
第9図-12	3	-	削器	剥片石器	フォルンフェルス	灰色	68.5	98.5	11.5	寺前No.4+20.10.28	端刃に一部欠損あり
第9図-13	7	-	打製石斧の未製品	石材不明	砂岩	灰色	70.0	44.5	105.4	寺前No.32+20.11.12	基部破損部に二次加工痕
第9図-14	9	-	二次加工痕を有する剥片	剥片	フォルンフェルス	灰色	62.5	108.0	18.0	寺前No.12+20.10.28	
第9図-16	一括	-	二次加工痕を有する剥片	剥片	頁岩	灰色	59.0	81.0	28.0	129.5	寺前表土一括+20.10.16

* 第10図に遺物出土地点を掲載。ただし、2・16については詳細な出土地点が不明なため未掲載。

その他、遺物図版未掲載の遺物については、ドットで位置のみを記している。

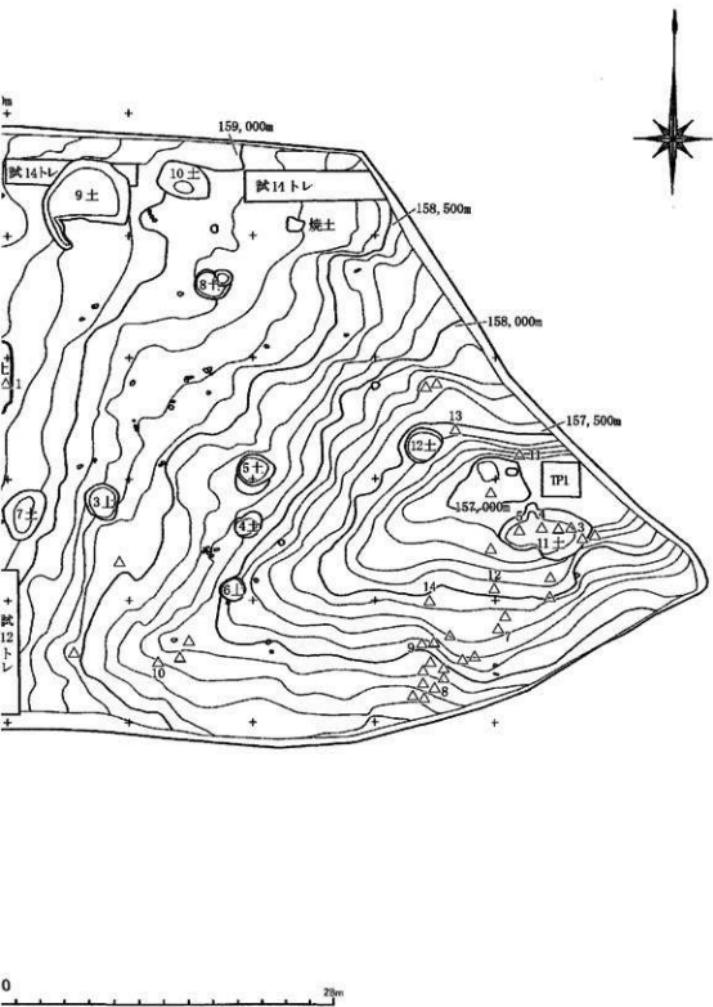


凡例

- 試 = 試掘
- トレ = トレンチ
- 1土 = 1号土坑
- 1溝 = 1号溝
- 焼土 = 焼土遺構
- △ = 点上げ遺物の出土地点
- 番号 = 遺物図版計算番号
- 番号なし = 図版未掲載
- ※第9図-2については、10号土坑出土だが、詳細地点が不明なため未掲載

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

第10図 調査区の地形と遺構・遺物の位置



写真図版

図版1 調査区全景（北=右）



図版2 調査区内の状況 1



調査前の状況（北西から撮影）



表土掘削状況（東から撮影）

図版3 調査区内の状況2



調査状況（西から撮影）



調査状況（東から撮影）

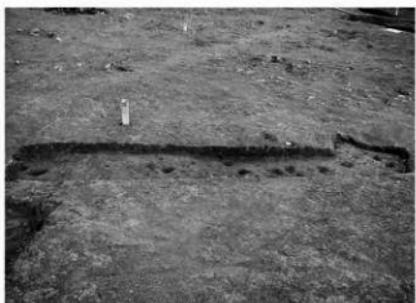
图版4 遗構1（1~3号土坑）



1号土坑（半截状况）



1号土坑（完掘状况）



2号土坑（半截状况）



2号土坑（完掘状况）



3号土坑（半截状况）



3号土坑（完掘状况）

图版 5 遗構 2 (4~6号土坑)



4号土坑（半截状况）



4号土坑（完掘状况）



5号土坑（半截状况）



5号土坑（完掘状况）



6号土坑（半截状况）



6号土坑（完掘状况）

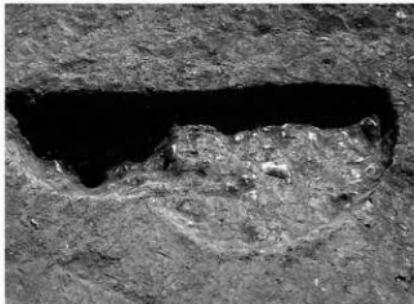
図版6 遺構3 (7~9号土坑)



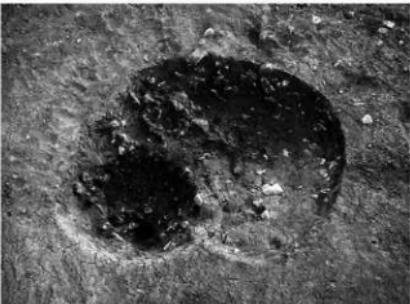
7号土坑（半截状況）



7号土坑（完掘状況）



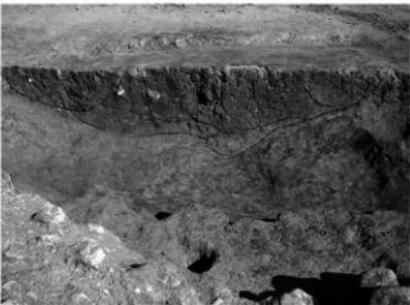
8号土坑（半截状況）



8号土坑（完掘状況）



9号土坑（半截状況）

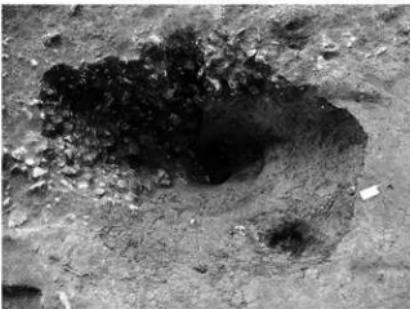


9号土坑（土層セクション）

図版7 遺構4（9～12号土坑）



9号土坑（完掘状況）



10号土坑（完掘状況）



11号土坑（完掘状況）



12号土坑（検出状況）



12号土坑（半截状況）

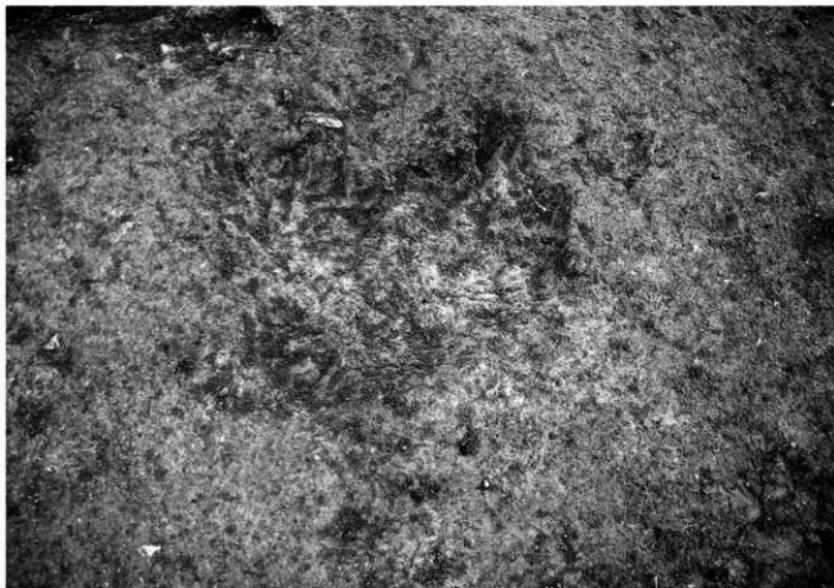


12号土坑（完掘状況）

図版8 遺構5（焼土遺構）



焼土遺構（検出状況）



焼土遺構（完掘状況）

図版9 遺構6（1号溝・2号溝）

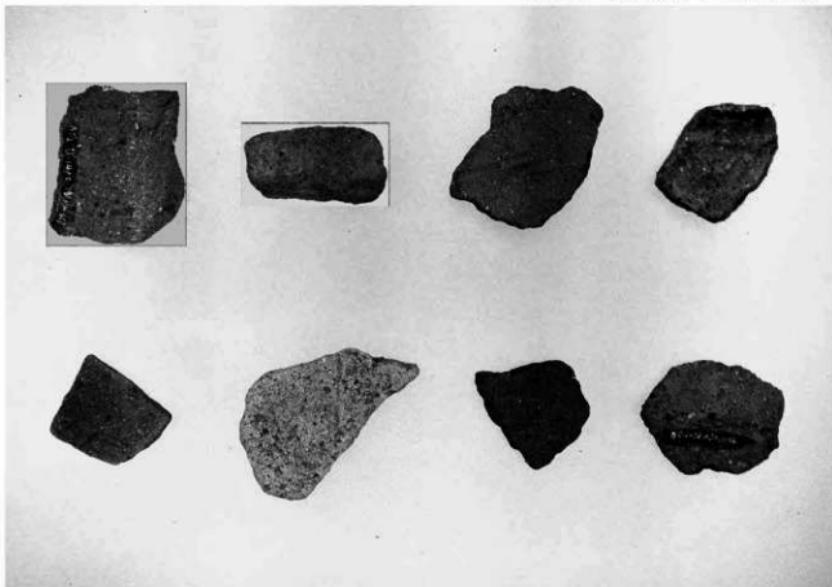


1号溝と2号溝（完掘状況：南から）



2号溝（SPA）の土層堆積

図版10 出土遺物1（縄文土器）



縄文土器（図版掲載遺物）

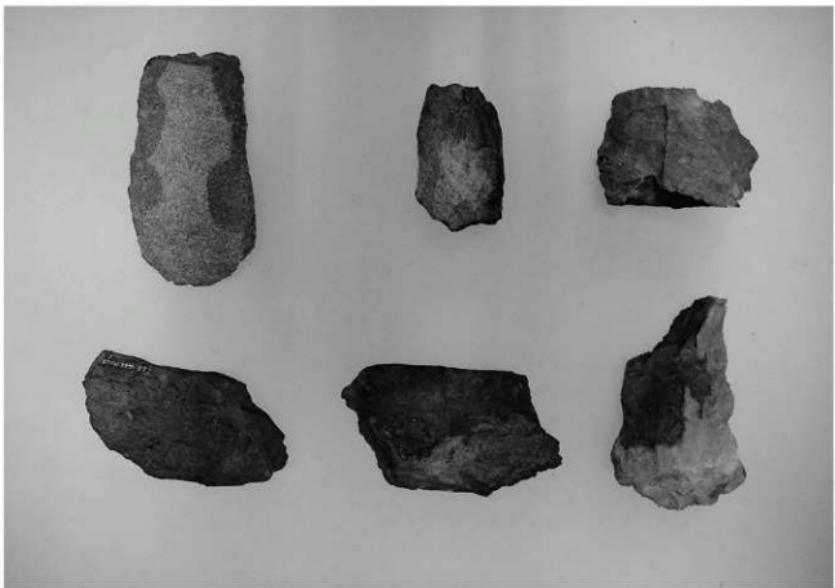


縄文土器（谷部出土の小破片）

図版11 出土遺物2（須恵器・陶器・石器）



須恵器と陶器の破片



縄文時代の石器

報告書抄録

ふりがな	てらまえいせき						
書名	寺前遺跡						
副題	中部横断自動車道南部インター建設事業に伴う発掘調査報告						
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第264集						
著者名	山本 茂樹・上原 健次						
発行者	山梨県教育委員会・国土交通省関東地方整備局						
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター						
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016						
発行日	2009年12月25日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
てらまえいせき 寺前遺跡	やまなしけん みなみこまぐん なんぶちょう なかの あざてらまえ ちない 山梨県南巨摩郡 南部町中野 字寺前地内	366	366-0052	新 35° 18' 09"	新 138° 26' 48"	平成20年 10月4日 ~ 平成20年 12月9日	1600m ² 道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
寺前遺跡	散布地	縄文・中世	土坑・溝・焼土遺構	縄文土器・石器・須恵器・陶器		調査区内に東西方 向に谷状の傾斜	

要約	本遺跡は、中部横断自動車道建設事業に先立ち発掘調査が実施された。遺跡のすぐ南には、有名な竪穴遺跡が存在している。調査された遺構の数は少なかったものの、見つかった縄文時代の土器片や石器などから本遺跡の周辺に小規模ではあるが集落の存在が想定されるものであった。
----	--

本書に関する情報 表 紙 テンテンレザー 200kg
 口絵・あらまし コート 76.6kg
 本文 書籍 46.5kg
 写真 図版 コート 76.6kg
 抄録・奥付 書籍 46.5kg
 体裁(標準) 50字×42行・明朝体・10.5ポイント

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第264集 寺前遺跡

中部横断自動車道南部インター建設事業に伴う発掘調査報告

印刷日 2009年12月20日

発行日 2009年12月25日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

〒400-1508 山梨県甲府市下曾根923

Tel 055-266-3016 Fax 055-266-3882

<http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/index.html>

発行 山梨県教育委員会 国土交通省関東地方整備局

印刷 港北出版印刷株式会社